

軽度発達障害児の親の語りと「親の会」の結束

山口 裕子 内山 久美 藤田 佳代子*

軽度発達障害についての研究は、1800年代中期の医学における脳研究が出发点であり、現在では医学・心理学・教育学分野を中心に、障害部位の特定や個人の能力向上を目的とした研究が行われている。軽度発達障害には原因が特定されていないものも含まれるが、国際的に用いられている診断基準も幅のある解釈が可能なものがあり、診断の重複がおきやすい。また、発達の障害が軽度であるために正常な発達との境界も不明瞭となっている。

このように連続性のある障害であるが、その「親の会」は、教育的・行政的対応の変化に焦点を当てた活動をおこなっている。さまざまな特徴をもつ子どもの親であり、その経験のストーリーも異なっている「親の会」の会員が一つの集団として活動が出来るのは、「親の会」が独特の集団として形成されているからだと考えられる。親としての苦勞の経験は、軽度発達障害児の親同士が語り合うことを通じて、その中で他の社会集団の状況との差異を明らかにすることで、共通のものとして認識されている。また、親の語りという相互作用を分析することで、通常の疾患をもつ子どもの親の語りとは異なった常識の上に立つ表現を使用し「親の会」に特有なストーリーを語り続けることによって、「親の会」が一定の機能をもち成り立っているということがわかった。

反面、「親の会」が軽度発達障害児の社会への適応を目指して教育や行政機関に働きかけているにもかかわらず、その活動そのものが、結局は軽度発達障害というカテゴリーを親もまた一つのカテゴリーとして構築しているという側面をもつことも明らかになった。

キーワード：軽度発達障害、親の会、相互作用、ストーリー

I. 緒 言

軽度発達障害児とは、知的障害を伴わないが学校や社会という集団において、その時代、文化、社会に沿った一般的な発達段階とは異なる様々な問題をもち、かつ障害の程度が軽度である子どもたちのことを指す。文部科学省は、2002年に軽度発達障害児が学齢人口の6パーセントに及んでいることを報告¹⁾し、2004年1月に「小中学校における学習障害・注意欠陥多動性障害・高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制のためのガイドライン（試案）」を出している。このような動きのある中で軽度発達障害の研究は、医学、教育学、心理学分野での研究がほとんどを占めている。

その診断基準は、国際的に用いられている、アメリカ精神医学会作成の「精神疾患の診断と統計のためのマニュアル第4版（DSM - IV）」やWHO作成

の「国際疾病分類第10版（ICD - 10）」においても基本的な部分はほぼ同一な基準が示されている。しかし、「注意を要するのはこの大半が臨床的症候群であり、臨床的行動的な症状を用いて操作的な診断を行う形式となっているため、全体的認知機能の障害、学習の障害、社会性の障害、行動の障害など異なった軸で臨床的な特徴を捉えているため、診断の重複という問題が生じることである。」²⁾と水野らが述べているように、異なった臨床的症状を併せ持ちながらそれぞれの障害の境界が曖昧なものとなっている。なかでも学習障害と他の軽度発達障害との鑑別は大きな問題となっている³⁾。また、発達の障害が軽度であるために正常な発達との境界も不明瞭となっている。そのため学習障害の概念が混乱するなか、医学的には、学習障害の概念の再考を行い、症状と対応した病巣を念頭においた診断による狭義の学習障害の概念に限定し、電気生理学を駆使して

障害部位の特定を可能にする研究⁴⁾がなされている。一方教育・心理学分野では、小・中学校の教員、教育行政関係者、小児精神科医、親の会、臨床心理士など多彩な人々による子どもの認知、実際の指導方法、子どもの自己意識等に関する研究⁵⁾が行われているが、いずれもほとんどが個人の能力向上を目的とした、個人を対象とした研究となっている。

しかし、社会集団において一般的な発達をとげた人々との関係性に特徴をもつ障害であるからこそ、軽度発達障害を個人の障害のみの問題とみなすのではなく、社会の人々の活動の連鎖として社会の中で生み出された部分をもつ障害として相互作用的な視点でとらえる必要があるだろう。経済や流通の発達していない時代においては、書字や読字・抽象的な計算・活動性やコミュニケーションなどに軽度の問題を抱えていても、現代ほど問題視されることはなかったことを考えると、軽度発達障害は時代や社会に影響を受けやすい障害であるとも考えられる。

ここでは軽度発達障害の家族会とも言える「親の会」会員の語るストーリーを分析することにより、軽度発達障害がどのように捉えられているのか、また様々な障害像をその中に含み、単一の疾患の家族会ではないにも拘らず、「親の会」が設立より15年にわたり結束して一つの集団として活動を続けていることの意味を明らかにする。

Ⅱ. 方 法

1. 調査対象

学習障害・注意欠陥多動性障害・アスペルガー障害・高機能自閉症などに代表される軽度発達障害児の親の会のうち、「全国LD（学習障害）親の会」に属する「Mの会」（以下、「親の会」と略す）の会員を対象とした。対象を「親の会」の会員としたのは、「親の会」が学習障害の他に学校や社会への適応・療養上の問題に共通する事柄の多い子どもたちを広くLD（Learning Disabilities）児と捉えており、医学的診断基準のLD（Learning Disorders）だけでなく、注意欠陥多動性障害や高機能自閉症などの児の親を含めて「同じ悩みをもつ仲間」として活動しているからである。

2. 調査方法

平成15年4月～7月の間に「親の会」会員へのイ

ンフォーマルな場での1対1のインタビューと「親の会」の事務局会議での会員同士の会話に参加する形で録音を行い、録音されたものの一部をトランスクリプト（音声転写文）^{註1)}に直したものを使ってストーリーの分析をおこなった。

研究代表者は調査前に半年間「親の会」の事務局会議や総会にオブザーバーとして参加し、会員が話しやすい環境設定ができるように努めた。尚、調査にあたり、依頼時に調査の目的、方法、安全性、プライバシーの保護、データの活用法、同意撤回の自由について口頭で説明し、同意を得られたものについてインタビューや会話の録音を行った。また、個人が特定されないように個室でインタビューをし、録音されたデータの取り扱いには研究代表者のみでおこなった。得られたデータの検証は、会話分析を少なくとも一年以上おこなっている研究者5名以上でおこなった。

3. 分析方法

「ストーリーの社会学」という考え方を元にトランスクリプトを分析し、「親の会」の会員が語る共通のストーリーを抽出した。ストーリーの社会学とは、シンボリック相互作用論という流れを受け継いでいる方法で、心理的な現象であれ社会的な現象であれ、その現象をめぐるなんらかのストーリーが共有され語られることを通して、特定の地域における特定の時代の社会現象が顕在化するという、そしてそのストーリーが語られて初めてそれに伴う感情もまた表現可能になるという考え方を基礎としている方法⁶⁾である。また、これまでの社会科学の言語観では会話や語りはある現実や世界を描写する媒介として考えられていたが、ここでは言語を通じて人や経験はつくられる⁷⁾と考えている。

Ⅲ. 結 果

「親の会」会員6名の、総録音時間約480時間の会話場面から、同じようなはたらきをしていると考えた会話場面を抽出した。それらの会話場面の分析の修正を繰り返してストーリーの整合性を高め、データの中で何度も同じはたらきのストーリーが語られているそれぞれのストーリーに「軽度発達障害の位置づけ」、「苦勞の定式化」、「親密な関係との分離」と命名した。以下に代表的な会話データと分析結果

1. 軽度発達障害の位置づけ

1) 代表的なデータと分析

〈データ1〉

- 148 A ; その：そこが結構：その：共通してみんなが理解、ね、言葉があんまりなくても共通して理解してく
 149 れるようなところがね表されるのであれば、もう少しこの子たちは楽になるのかな：って。
- 150 B ; う：ん
- 151 A ; [それがレントゲンだったりするならどれだけ良いか hh わからないけど
 152 B ; hh
- 153 A ; なんせ頭の中 hh だけなんですって [ねえ hh 言ったのよその時は
 154 B ; [hhh う：ん
- 155 A ; で、その時は先生も、ああって何となく納得されて
 156 B ; う：ん
- 157 A ; だから結局うちなんかは社会性の問題だから [う：んあの：特にその社会性の問題のところなんかは
 158 B ; [う：ん
- 159 A ; よく見えない、[見えづらいって。知的な問題だったらまだ見えるけど
 160 B ; [う：ん う：ん
- 161 A ; 自閉症のお子さんたちが何が一番問題かという知的なところじゃないもんね
 162 B ; う：ん
- 163 A ; 自閉症の自閉症たる、あの：なんていうの hhh あの世界
 164 B ; うん
- 165 A ; hhh が皆さんやっぱり問題っていうか
 166 B ; う：んみんなが理解出来ない [ですよえうまく
- 167 A ; [そうそうってところが一番困ってらっしゃる [御本人さんも親さんも
 168 B ; [う：ん
- 169 A ; [関わる人も困ってるところで知的なところというのはまたひとつ違うところなん(.)と思うのよね
 170 B ; [うん
- 171 B ; うん
- 172 A ; もちろん、知的障害の人がそれで楽ってわけじゃ全然ないのよ
 173 B ; う：ん
- 174 A ; じゃなくて、その：今までの考え方がやっぱり知的の知的障害のラインでずっときてるから
 175 B ; う：ん
- 176 A ; ある程度知的障害のその教育：とかも [ある程度確立されてきてるたいねえ、今までね
 177 B ; [うん
- 178 A ; っていうところから考えるとやっぱりちょっと見方を変えてもらわないと困る子どもたちたいね
 179 B ; う：ん、[そうですね
- 180 A ; [う：ん、できないけん困ってるんじゃないもんね
 181 B ; うん
- 182 A ; 出来るけど出来方が違うけん困ってる hh ってところもあるしね hhh

を挙げる。

データ1は、小学校低学年では学習障害、小学校高学年でアスペルガー障害という診断の変遷をたどった中学生の子どもを持つ親へのインタビューの一部である。この会話の中で親は、「みんな」

(148, 166) という極端な語を使用することで「みんなが理解できない」(166) という自らの主張を強調する結果となっている。また、「共通して理解してくれる」ところに「レントゲン」(151) という身体的な問題に関連のある語を使用することで、身体的な問題と自閉症の問題を対比させ、子どもの問題

は身体的な問題のように何らかの検査結果や資料を見ることで共通に理解できるものではないことを際立たせている。

また、「知的な問題」(159)は、これまでの障害の考え方も「知的障害のラインでずっときている」(174)し、知的障害の教育も「確立されてきている」(176)ために見える問題と位置づけている。その上で、自閉症の問題を「結局」(157)という語を使用することで、最終的には「社会性の問題」(157)であると限定している。知的な問題に見える問題と位置づけて、それに対比させることで、自閉症は社会的な問題で知的障害とは違う「見えづらい」(159)問題をかかえていると語っているのである。その見えづらい問題とは、自閉症の世界をみんなが理解できないということから派生してくる問題

で、今までのような身体障害や知的障害といった障害観のなかには存在しないため、身体障害や知的障害とは見方を変えなければ理解しにくい子どもたちとしている。成員カテゴリー化装置⁸⁾を使って、会話の中で身体障害や知的障害を「見える問題をもつ障害」と位置づけることで、自閉症を「見えづらい問題をもつ障害」という異なるカテゴリーとして位置づけている。

2) その他のデータ

アスペルガー障害児の親に限らず、他の会員のデータ中にも身体障害や知的障害との対比は頻繁にみられ、その他にも重度心身障害児や健常児との対比もみられた。今回得られたデータの全てが、他のカテゴリーとの対比により軽度発達障害児の位置づけを行った上で、会話のトピックである苦労談と教

2. 苦労の定式化

1) 代表的なデータと分析

〈データ 2〉

- 97 B; なんかどこ行ってもさ: [結局はなんか, あ, な: い↑
 98 C; [hhh
 99 B; どこ行ってもさ: (0.2) 満たされないっていうか, 結局。
 100 A; だから次から次に [行くんですよ hh
 101 B; [そうそう
 102 B; いやいや, ちが, そのね。あの: そのね, お話をしたりさ:, そのお友達, たとえば
 103 B; あの: ちょっと重い: 人の: [親の, 障害者の親の会のとことか,
 104 A; [う: ん
 105 B; [もう普通のさ: ね:
 106 C; [う: ん
 107 B; 隣のお友達の [ところとかいろんなところで, どこへ行ってもやっぱり満たされないとたい。
 108 C; [うんうん
 109 B; やっぱりその何ていうか
 110 A; 自分の
 111 B; 自分のところで, の [苦しさが, 苦しさじゃない, そのなんていうの。(0.2)
 112 A; [うん
 113 B; 軽いがゆえの苦しさっていうのが, あるじゃない
 114 C; う: ん
 115 B; その部分が一番苦しいんだよね。[なんかね。
 116 C; [う: ん
 117 B; そこがわかってもらえ [ないけん。軽いけんが問題が軽いんじゃないもんね。
 118 A; [そうそうそう
 119 A; そう
 120 B; ねえ。[軽いけんが理解されてないことが (.) [とても問題になる [とたいね
 121 A; [軽いから問題なんですよ [うん [そう

育や行政への要望を語っていた。今回収集したデータ中には精神障害との対比はみられなかった。

データ 2 は、「親の会」の事務局会議というフォーマルな場での会話の一部であり、注意欠陥多動性障害・アスペルガー障害・未診断だが学校への適応に問題をもつ子どもの親たちの会話である。この会話の中で親は、どこへ行っても「結局は満たされない」(99)、「やっぱり満たされない」(107)と語ることで、他のカテゴリーの中では満たされないという自分たちの置かれている状況をメンバーの目に見えるようにしている。

重度の障害者の親の会(103)や普通の「隣のお友達」(107)というカテゴリーに対比させて、「自分のところ」(111)すなわち「軽度発達障害児の親の会」をあげて、自らを重度の障害のカテゴリーでもない、健常者カテゴリーでもないところに位置づけて、自分たちの苦しさは他では理解されないことを強調している。会話中に「苦しさじゃない」(111)と否定しているのは、重症であるほど苦しいとカテゴライズされている一般的な苦しさであり、その一方で自分たちの苦しさは「軽いがゆえの苦しさ」であると言い換えを行っている。これは、一般的な「苦しさ」という語彙の使用では軽度発達障害児の親としての自分の立場を正当化できないからだ

と考えられる。「軽いがゆえの苦しさ」と修復⁹⁾を行うことで軽度発達障害児の親特有の苦しい立場を正当化することができ、軽度発達障害児の親同士で「苦しさをわかってもらえず満たされない」と共通に語り合える表現上のブロックとなっている。

2) その他のデータ

障害が軽度であることに付随する様々な苦勞が語られ、それが「親の会」としての教育や行政への要望につながっていた。主なものを以下に挙げる。

軽度発達障害児本人に関することとして、「知的障害がないために公的援助が受けられない」、「通常学級・障害児学級・養護学校のどこにも居場所がない」、「怠けやふざけと思われる」、「義務教育以降の進学や就職の困難」、「いじめ」、「級友や教員とのトラブル」、「本人と親とのトラブル」、「二次障害としての不登校や自己評価の低下」などが語られていた。

軽度発達障害児の親に関することとして、「子どもの問題をしつけや親の無関心と位置づけられること」、「普通の人と同じことは出来ないが障害者としても生きられない子どもの将来への不安」、「会員と他の保護者とのトラブル」などが語られており、「同胞もいじめを受けている」という語りもみられた。

いじめについては多田らの調査¹⁰⁾でも高機能自閉症やアスペルガー障害が含まれる高機能広汎性発

3. 親密な関係との分離

1) 代表的なデータと分析

〈データ 3〉

- 39 A; なんかあの: 小学校に入った途端に今度はいきなり (.) 規律, 規律っていうかな, きちんとした集団生活が [出来ないということで [あの: 普通じゃないって急に言われたたんですよね
- 40
- 41 B; [うんうんうんうん [うん
- 42 A; おかしいと。で, お母さんのしつけが悪い [だとか, 小さいときの関わりが悪かった [とかね
- 43 B; [う: んう: ん [うんうん
- 44 B; 愛情が薄いとか言われたもん
- 45 A; うん校長先生とかにまで言われてですよ hhh
- 46 B; う: んう: ん
- 47 A; んで, あの: 何ていうのかな: 。責められたから (.) 一生懸命やったけど (0. 3) こう学- 責められたっていうか, 責められたから自分が責められたく hh なかったのもあって
- 48
- 49 B; う: ん
- 50 A; 一生懸命なんか [子どもにも厳しく関わったんだけど
- 51 B; [うんうんうんうん
- 52 A; ある意味その時ってなんかこう学校が言ってることそのまま子どもに言ってるようなところあったんで
- 53 すよね
- 54 B; う: ん

中略

- 71 A; あんなにぎゃーぎゃー言ってたのは本当は子どもに普通になって hh ほしいからって自分で思ってた
 72 けど自分が責められなくなかったからかなって [今
 73 B; [それは一番にある [だからね, あの:
 74 A; [苦しかったんですよ責められて
 75 B; 駄目な母親とか しつけができてないとか 言われるのすごく嫌だったの
 76 A; うん うん
 77 A; あなたに育てられたから [こんな子になったのよとかですね
 78 B; [うん
 79 A; あの: 私, 夫からも言われたことあるんですよ。おまえが育てたけん, おまえみたいなのが育てるけ
 80 ん子どもがおかしくなったんだって
 81 B; な: んそれ, 離婚ね。離婚, 離婚 hhh
 82 A; hhh でしょう↑離婚したくなるでしょう [なりましたよ, 私も。
 83 B; [ねえ, そんなこと言うなん [て, 一番きついときにね。
 84 A; [ね: しかも自分はしかも自分
 85 はまったく関わらないのにねという気持ちもありましたから
 86 B; う: ん
 87 A; なんかでもあまりにも学校の先生からも夫からも誰からもっていわれてるとね, 本当にそうかもしれ
 88 ないって思ったりなんかしてですね。跳ね返す元気がなくなっちゃったですね
 89 B; う: ん
 90 A; そしてなんかもう責められるのが嫌で嫌で, 責められないために一生懸命普通になってほしかった
 91 hhh 私はですね [たぶん, 今振り返ってみると
 92 B; [うんうんうんうん いや私, 子どもにちゃんとなってほしいと言う前に
 93 ね, 自分が人から言われたくないってのがすごくあった。
 94 A; う: ん。私もありました。なんでこんなにみんなからいろいろ言われるのだろうってね:
 95 B; う: ん
 96 A; 普通のよそのご家庭を見て [ても, そんな変わらないじゃないですか, ねえ↑
 97 B; [う: ん, う: ん
 98 B; 私も, 主人から, 主人は黙ってたけども, 私の兄からね
 99 A; うん
 100 B; 二番目の兄からお前の育て方が悪かっちゃないと↑って言われた時に
 101 A; うん
 102 B; あっやっぱり, わかってもらえないなってそんな時に
 103 A; う: ん

達障害児の約 8 割がいじめを受けていたという報告がなされている。

データ 3 は注意欠陥多動性障害児をもつ親と小学校への適応に問題を示す子どもをもつ親の会話の一部である。ここでは小学校の教員と、配偶者・母親の兄という一般的に母親とレリバントであると考えられているカテゴリーの対比が行われている。子どもが「きちんとした集団生活」(39)ができない原因帰属は、どのカテゴリーからも「母親」(75)に

あるとされたと語られており、それらを「責められた」(48)と意味づけすることによって、責められなくなかったので「一生懸命子どもにも厳しく関わった」(50)という経験としての語りをしている。また、「誰からも」(48), 「みんなから」(94) 責められたという極端な語り方をすることで、母親だけが責められているということのリアリティの構築を強化している。

特に「夫」(79)は、自らも軽度発達障害児の親であるが、教員カテゴリーと同じように配偶者であ

る「母親」を責めるカテゴリーとして語られており、そのように語ることによって、一般的には最小のコミュニティであると考えられる夫婦から「母親」を切り離す作業が言語的におこなわれている。同じように「兄からお前の育て方が悪かっちゃんとい↑って言われた」(100)と語ることによって、一般的には他より近い存在であると考えられている兄が教員と同じように「母親」を責めていると語ることで、結果的に兄弟から「母親」が切り離されている状況を示している。そして、「やっぱり」(102)という、そもそもそうであったかのように語る言い回しを使って他のあり得るであろう解釈のバリエーションを排除して、それ以前の会話を「わかってもらえない」(102)ことを強調するエピソードとして組み立てておしている。

母親は軽度発達障害というカテゴリーを受け入れることによって「こんな子になった」(77),「子どもがおかしくなった」(80)という原因帰属から解放されることが考えられる。また、軽度発達障害児の母親が、配偶者や兄弟といった、より母親にレリバンであると考えられているカテゴリーから分離されていると状況を語ることで、共通の経験のストーリーとなり、拠り所としての「親の会」のまとまりが作られ維持されていくことにつながると考えられる。

2) その他のデータ

データの中には、「親の会」の会員との分離のストーリーと、軽度発達障害児との分離のストーリーがみられ、親密と考えられる人との関係の分離が語られていた。会員との分離のストーリーの中には、会員のほとんどが母親であることから、夫との分離が2場面、兄弟との分離が2場面、父母との分離が3場面、その他の親戚との分離が2場面がみられた。軽度発達障害児との分離のストーリーには、父親との分離が3場面、級友との分離は6人すべてのデータのなかにみられ、普通学級にも障害児学級にも属せないという学校の中での孤立のストーリーがみられた。

IV. 考 察

「親の会」の会員の語りを分析した結果、軽度発達障害というものが他の社会状況やカテゴリーと対比したかたちで、繰り返し語られていることがわ

かった。これは軽度発達障害の障害の程度が軽度であり健常との境界が明確でないことや、高橋¹¹⁾が述べているように、日本の知的障害児・者の援助プログラムは、IQによって障害の程度を認定し、療育手帳を発行し、それに基づいて援助が受けられる仕組みになっているため、軽度発達障害児が公的援助の対象から外されてしまうという状況によると考えられる。会話の中で何度も知的障害や重度の障害などの他のカテゴリーと対比した形で語られなければならないのは、軽度発達障害が既存のカテゴリーとの連続性のあるカテゴリーであるため、軽度発達障害と他のカテゴリーの境界が曖昧なので、常に他との差異を明らかにすることで、軽度発達障害というカテゴリーを明確にする必要があるからである。

次に明らかになったことは、軽度発達障害の位置づけを明確にした上で、その状況にあることから派生してくる問題を苦勞として語っていることである。「子どもがまわりから理解されず、怠けやふざけと思われる」、「子どもの問題をしつけや親の無関心と位置づけられる」、「進学や就労の困難」、「公的・私的な支援の対象とみなされない」などの事実を、軽度発達障害というカテゴリーを明確にすることで、問題と位置づけて苦勞のストーリーとして語っている。苦勞があるということが、相互作用の成員にとって共通に想定される前提となっており、「軽度発達障害児の親」としての経験が共通のものとされることで相互作用が円滑に営まれていると考えられる。子どもが実質的にある状態にあるということではなく、子どもがこういう状態にあるということをお互いに語り合えることに支えられていると言える。

また、「軽度発達障害児の親」としての苦勞が、通常の疾患や障害をもつ子どもや健常児の親とは異なって語られていることも一つの特徴である。一般的な医療・障害モデルの「疾患(障害)が重ければ重いほど苦勞が大きい」という常識を前提としたならば、「軽度発達障害児の親」の苦勞は軽いものになってしまうため、ここでは「どこへいっても満たされない軽いがゆえの苦勞」という語りによって自らの苦勞談を正当化しようとしている。同じように、「軽いがゆえに理解されないことが問題」、「障害があると聞いてもさほどショックはなかった。半分ちよっとほっとした」などの特定の語りは、軽度発達障害児の親が共有する語りであると同時に経験そのものでもあり、メンバー共通の経験とするための

表現上のストーリーのブロックのようなものである。「説明の構築は、人びとが自分の当面の目標にふさわしい表現形式を選び実行することによって成し遂げられる」¹²⁾ と、バーが言っているように、暗黙の前提としているものの上に、常識とは異なる表現をつかって苦勞のストーリーをつくりあげていると言える。

その他にも、軽度発達障害児の級友や父親からの分離のストーリーを語ることや、母親と夫や親戚との分離のストーリーを語ること、軽度発達障害児やその親の孤立という意味を表し、その結果としてほかに拠り所をなくした親の集まりとして「親の会」の組織の結束を強化している。

以上から、「軽度発達障害児の親」は自分たちの子どもについて語ること、軽度発達障害の位置づけを行い、それをもとにして自分たちの苦勞を語り、苦勞のストーリーを共有することで共通の経験としていき、その上で自分たちの主張を正当化しようとしていることが明らかになった。

一方、「学校内での孤立」のストーリーや「いじめ」を受けているストーリーを語るとは、軽度発達障害児の経験を社会的弱者としての経験として位置づけるという側面をもっており、軽度発達障害児が社会的弱者であるということを前提に、軽度発達障害児の親は学校や行政への公的支援の要望が正当であると主張できる。「親の会」では軽度発達障害の問題を共通の問題であるかのように語ること、自分たちのおかれた立場や適応の仕方を発達させて、様々なストレスから子どもや自分を守り、社会への適応のために、教育や公的支援、教員のありかたを具体的に示すという活動を行っている。しかし、それと同時にそのような活動を行うことで、親もまた軽度発達障害というカテゴリをつくりあげる役割を担っているという別の面があることも忘れてはならない。様々なストレスから自分たちを守るために、「親の会」の主張を正当化し、まとまりが益々維持されることで、軽度発達障害というものを、親もまた作り上げてしまうのである。

V. 結 語

さまざまな症状の違う子どもの含まれる軽度発達障害児の「親の会」は、どのように作られ維持されているのだろうか。これらの問いに対して二つの示

唆を得た。一つは、軽度発達障害児の親が共有する特定のストーリーや言語編成をブロックのように組み立て、会員の目に見えるようにして共有することで「親の会」が独特な集団として形成されていることである。第二に、親密な関係からの分離のストーリーを語り共有することによって軽度発達障害児の親の共通の経験が更に明らかになり、会としての結束が維持されているということである。

他方、「親の会」が独特な集団として組織化されていくことは、結果的に彼らに対する様々なストレスに対抗し、自らの抱える問題の正当性を主張することになっている反面、自らの正当性を主張することが、結局は軽度発達障害というカテゴリーを親もまた一つのカテゴリーとして構築することに加担してしまうというジレンマを抱え込んでしまうことになる。軽度発達障害児の親の語りは、ストーリーを語ること自分たちの現実を定義し、社会的な圧力に抵抗し、軽度発達障害児の親というアイデンティティを形成していく過程であるとも考えられるのである。

謝 辞

今回の調査にご協力いただいた「軽度発達障害児(者)親の会」の皆様と小論を導いてくださった方々に深く感謝申し上げます。

註

- 1) トランスクリプトに使用されている記号
- [] 複数行にまたがる角括弧：
参加者たちのことばが重なっていることを示す（重なるの終わる個所は示されないこともある）。
- () 丸括弧：なにかことばが発せられているが、聞き取り不可能であることを示す。また聞き取りが確定できない場合は、当該文字列が丸括弧で括られる。
- (数字) 丸括弧で括られた数字：その数字の秒数だけ沈黙のあることを示す。また、ごく短い間合いは「(.)」という記号で示される。
- : : コロンの列：直前の音か延ばされていることを示す。
- ハイフン：直前のことばが不完全なまま途切

れていることを示す。

? 疑問符：語尾の音が上がっていることを示す。

。 句点：語尾の音が下がって区切りがついたことを示す。

(↑) 上向き矢印：音調が極端に上がっていることを示す。

(↓) 下向き矢印：音調が極端に下がっていることを示す。

hhh hの列： 呼気音を示す。

.hhh 直前にピリオドをとまうhの列：吸気音を示す。

—— 下線：当該個所の音が大きいことを示す。

引用文献

- 1) 大井学：ことばの問題から見えてくるもの。発達, **巻, 93号：13, 2003.
- 2) 水野智之, 河村雄一, 杉山登志郎：精神医学的診断。高機能広汎性発達障害, 杉山登志郎, 辻井正次編著, プレーン出版, pp17-28, 1999.
- 3) 杉山登志郎他：学習障害を主訴として来談した児童128名の診断学的検討。小児の精神と神経, 32巻, 3号：251-258, 1992.
- 4) 宮尾益知：学習障害の脳生理学-病態解明と神経生理学的アプローチ。脳と発達, 31巻, 3号：249-56, 1999.
- 5) 日本LD学会第12回大会発表論文集, 2002.
- 6) ケン・プラマー：ストーリーの社会学への招待。セクシャル・ストーリーの時代-語りのポリテクス, 桜井厚, 好井裕明, 小林多寿子訳, 新曜社, pp35-63, 1995.
- 7) ヴィヴィアン・バー：言説使用者としての人。社会的構築主義への招待-言説分析とは何か, 田中一彦訳, 川島書店, pp173-190, 1997.
- 8) 山崎敬一：成員カテゴリー分析。実践エスノメソッド入門, 山崎敬一編, 有斐閣, pp15-22, 2004.
- 9) 串田秀也：助け舟とお節介-会話における参与とカテゴリー化に関する一考察。会話分析への招待, 好井裕明, 山田富秋, 西阪仰編, 世界思想社, pp139-41, 1999.
- 10) 多田早織 他：高機能広汎性発達障害におけるいじめの臨床的研究。小児の精神と神経, **巻, 38号, pp195-204, 1998.
- 11) 高橋和子：親として何ができるか。高機能広汎性発達障害, 杉山登志郎, 辻井正次編著, プレーン出版, pp195-196, 1999.
- 12) ヴィヴィアン・バー：人であることは何を意味するか。社会的構築主義への招待-言説分析とは何か, 田中一彦訳, 川島書店, pp185, 1997.

参考文献

- P・コンラッド, J・W・シュナイダー：逸脱と医療化-悪から病いへ, 進藤雄三監訳, ミネルヴァ書房, 2003.
- D・ウィリアムズ：自閉症だったわたしへ, 河野万里子訳, 新潮社, 2000.
- ロバート・F・マーフィー：ボディ・サイレント-病いと障害の人類学, 辻信一訳, 新宿書房, 1997.
- ハーバード・ブルーマー：シンボリック相互作用論-パースペクティブと方法, 後藤将之訳, 勁草書房, 1991.
- ポール・E・ウィリアムズ：ハマータウンの野郎ども, 熊沢誠, 山田潤訳, 筑摩書房, 1996.
- 浅野智彦：自己への物語論的接近-家族療法から社会学へ, 頸草書房, 2001.
- 福留晶子：LD(学習障害)と社会的相互作用論, 早稲田大学人間科学研究, 12号, 1999.
- 石川准, 倉本智明：障害学の主張, 明石書店, 2002.
- 深谷計子, 平井由美子：学習障害児とその近隣領域児の英語におけるつまずきと指導, 聖路加看護大学紀要, 25号, 1999.
- 赤坂憲雄：排除の現象学, ちくま学芸文庫, 1995.
- (平成17年2月14日受理)

山口裕子, 内山久美, 藤田佳代子
〒861-5598 熊本市和泉町325番地
熊本保健科学大学
保健科学部 看護学科

The Unifying Factors of Support Groups for Parents with Slightly Disabled Children

Yuko YAMAGUCHI, Kumi UCHIYAMA, Kayoko FUJITA

Abstract

Children with mild disabilities have slightly different processes of development compared with those of normal children. This results in difficulties in social interaction, such as problems in school and social life. And since the diagnosis of a child with mild disabilities is based on his/her clinical symptoms at any given time, the diagnosis of each child will change as that child grows older. The fact that the impediments and the developmental problems of these children are not severe makes it difficult to define “slight” disabilities. Thus, slight developmental disabilities are ambiguous and categorized as disorders with vague standards.

Parents with slightly disabled children make groups and do activities in order to receive support from local governments and educational organizations. The unique circumstances and difficulties that these parents must face is a cohesive element in uniting these groups with a strong sense of community.

Through their activities and discussions, there is a realization by parents that many experiences are shared as common experiences. Analysis of these interactions reveals distinct group characteristics, such as the use of different concepts and expressions not common to other parents with normal or disabled children. Moreover, these unique talks with members sharing similar perspectives help to create a common anchor of stability in the organization of these groups.

Even though the ultimate goal of these parents is to help their children adapt, the process of group talks and sharing common experiences creates a unique category of their own in dealing with the dilemma of raising slightly disabled children.